

7月2日(木)放送 「テーマ 天文・宇宙」

## 「星のきほん」

駒井仁南子／著  
誠文堂新光社 2007年 4月発行  
2階一般開架図書 (請求記号 443)

天文学というのは、誰でも一度はあこがれながら、よくわからない方が多いのではないのでしょうか。この本は、そんな方にも、とてもやさしく、星について説明してくれる本です。

それもそのはず、筆者はプラネタリウムや科学館、科学教室などの解説者、星のガイドだからです。見開き2ページごとに解説してある本なので、拾い読みしても楽しいです。

ところで、占いなどの自分の星座ですが、誕生日には見ることはできないのはご存知ですか？ 占いの星座は、太陽がその星座の位置にあるときのものだからです。つまり、昼間で見えないということです。自分の星座を見たい人は、誕生月の3か月くらい前の夕方、南の空を見てください。

もっと壮大な話もあります。宇宙に星が何個あるかという話です。これは、宇宙に限りがあるということが前提になるかもしれません。ハッブル宇宙望遠鏡が宇宙全体の3千万分の1を切り取った画像の中におよそ1万個の銀河が浮かんでいるそうです。ということは、宇宙全体ではおよそ3千億個の銀河があるということになります。銀河1つには千から2千億個の恒星があります。つまり、3千京から6千京個の恒星があるということです。

## 「あの星はなにに見える？」

出雲晶子／著  
白水社 2008年 5月発行  
2階一般開架図書 (請求記号 443.8)

星は、人間にとって特別な存在です。だから、「星座」のような人間の想いや夢や現実が反映したものがあ、星占いのように、星の影響を考えたりしました。そういう意味で、星についての学問は天文学だけではなく、人類学や民俗学の側面も大きくあります。この本は、ずばり「天文民俗学」の本です。

世界中の人々が星に何を託したか、様々な例から説明してくれます。

さて、7月7日は、ご存じ、七夕ですが、中国から朝鮮半島や日本に伝わった伝説です。似たような話は、東南アジアにもあるそうですが、バリエーションがたくさんあるそうです。日本も都道府県どころか、隣町・隣村でも違うということがああるそうです。

一応、元祖とされている中国の話は、『文選』(もんぜん)に載っているものが最初だそうですが、これは美しい詩の形になっています(※)。

※ 七月七日夜詠牛女 謝 恵連 (『新釈漢文大系』15 文選 詩篇 下 明治書院 633ページ)

## 「皆既日食」

武部俊一／著  
朝日新聞出版 2009年 5月発行  
2階一般開架図書 (請求記号 444.7)

今年7月22日は、46年ぶりに日本国内の一部で皆既日食が見ることができます。この本は、世界を駆け巡る「日食ハンター」たちの有様を描くとともに、報道の中、科学の中、切手の中、日本史の中、世界史の中、文学の中、映画の中というように、様々な背景の中での「日食」を多角的に採り上げています。

神聖ローマ帝国を打ち立てたカール大帝は皆既日食の数年後に亡くなりました。それで、その息子のルイ一世は、再び日食がやってきたとき、今度は自分の番だと恐れおののいたら、本当にその1ヶ月後に亡くなってしまったそうです。このように、日食は不吉なこととして恐れられていましたが、日本では明治時代ともなると、錦絵などにも採り上げられ、すでに、天文イベントとして一般の人たちにも紹介されるようになってきています。

最後は、皆既日食がなくなる日。6億1600年より先には、皆既日食は起こらないそうです。それまで人類がいるかどうか分かりませんが。

なお、日食を観察するときには、サングラスや煤付ガラスではダメです。いくら濃くても、太陽の強い光では目を痛め、大変危険です。安全が保証された日食グラスか、ピンホール投影で観察する必要があります。

7月16日(木) 放送 「テーマ 海」

## 「深海魚摩訶ふしぎ図鑑」

北村雄一／絵と文  
保育社 2008年 12月発行  
1階子ども読書室開架図書 (請求記号 481)

海に住む生き物たちは、広い海を泳ぎまわり「ダイナミック」な生活を送っているものばかりではありません。ふかーい、くらーい海の底で、ひっそり、じっくり、のったり生きているものたちもおります。

そんな個性的な深海の生き物の面々を紹介する本です。深海には光が届かず、そのため光合成をす植物がありません。彼らは、浅い海から落ちてくる他の生き物の死体などを食べ物にしています。そんな極限状況で生きている、タフな連中とも言えるでしょう。

めんどくさいので、他の生き物に便乗して移動する「サガミウキエビ」。何匹も合体してひとつの生き物のような格好をしている「クダクラゲ」。いざとなったら自分で茎を切って逃げてしまう「トリノアシ」という名前の「ウミユリ」の仲間。まるで、サバイバル大全です。

生きにくい世の中、深海の生き物に学んで、上手に生きてみませんか？

## 「海辺の漂着物ハンドブック」

濱口哲一／著  
文一総合出版 2009年 6月発行  
2階一般開架図書 (請求記号 380)

遠い南の島から流れ着くヤシの実…。と言ったロマンチックなものばかりでなく、いろいろなものが海辺には流れ着きます。空き缶、釣り道具、ライター、果ては、神仏の像まで。海辺に流れ着いた神仏を祀ったお寺や神社は各地にあります。

また、海とは言え、川を経由して、野山にあったものも流れ着きます。松ぼっくりやクルミの実、野菜に昆虫…。そんな海辺の漂着物を楽しむ(?) 手軽な本がこの本です。海辺に流れ着いたものを集めることを「ビーチコーミング」と言いますが、そんなことを趣味(学問?) にしている「漂着物学会」という学会もあるそうです。なんとこれは、高知県の黒潮町、NPO の砂浜美術館の中に事務局があるのです。

海岸のクリーンアップと海に漂い着く生き物や人間の世界を知るビーチコーミング、一石二鳥の楽しい活動、あなたも始めてみませんか？